

アジア

21

マラッカ海峡— 海の防衛と原油多ルート化

いた往時をしのんだものだった。その河口ではスマトラ島（インドネシア）からの大量の密航者を強制送還する光景を目にし、海峡が密航の海であることも知った。

マラッカにもよく出向いた。フラシスコ・ザビエルゆかりのセント・ポール大聖堂史跡から望むマラッカ海峡、チャイナ・タウンの美しい街並み、落地生根の華人が眠る墓地、ポルトガル人の子孫たちが繰り広げるポルトガル・フェスティバル——。

清の滅亡を早めたといわれる太平天国の乱もマラッカと無縁ではない。キリスト教的な幻想にかられた洪秀全は、1850年に広西で十余年に及ぶ大乱の引き金を引いた。マラッカの教会で植字工をしていた華人が書いたキリスト教入門書を中国・広州で手にしたのが、太平天国の乱の遠因となった。

今、マラッカ海峡をめぐるニュースが増えている。来年春には国際機関「情報共有センター」がシンガポールに設立される。東南アジア諸国連合と日本、中国、韓国、インドも運営に関与。海賊、テロなどの情報を一元管理し、海峡の安全確保を図る狙いだ。

マレー半島のマラッカ海峡沿岸をほぼ走破したことがある。詩人金子光晴の「マレー蘭印紀行」の主要舞台となったバトパハ（マレーシア・ジョホール州）、それにマラッカが記憶に残る。放浪の詩人が定宿にしたバトパハの旧日本人クラブ、その街を流れるシンパン・キリ川をみながら石原産業が採掘した鉄鉱石を満載した船が行き交った

今年9月からはシンガポール、マ

レーシア、インドネシア、タイの4カ国が「空の目作戦」と名付けた共同空中パトロールを始めた。インドネシア、マレーシア、シンガポールが昨年からは開始した海上パトロールに次ぐ安全強化策である。また、海峡を通過する船舶を共同で監視するシステム構築を進めることでも関係国は合意している。

主権への干渉問題などがからんで足並みが乱れがちだった沿岸国がマラッカ海峡の防衛で一致したのは、6月にロイド保険協会がイラク、ソマリア、レバノンなどと並んでマラッカ海峡を「戦争、攻撃、テロなどの危険地帯」として指定したのが理由の一つである。

マラッカ海峡が「危険地帯」と名指されたことについて、沿岸関係国からは「これまでの我々の安全への努力を考慮しない一方的な指定だ」との不満も出たが、このロイドによる事実上の安全確保勧告が関係国の結束に弾みをつけた形だ。

言うまでもなくマラッカ海峡は中東から極東への原油輸送の大動脈である。シーレーンの要衝だけに、中東原油に依存する極東諸国はマラッカ海峡での不測の事態に備えてリスク回避策、輸送ルートの多様化を模索してきた。マ

レー半島を横断する運河やパイプラインプロジェクトが多く構想されたが、いまだに一つも実現していない。

このリスク回避で先頭を走るのが中国である。02年に内陸の蘭州（甘粛省）から成都を経由して重慶の原油貯蔵ターミナルに至る約1250kmのパイプラインが完成。さらに広東省の製油所と雲南省の昆明、その昆明からミャンマーの港灣都市をつなぐパイプライン計画や構想などが浮かんでいる。中国石油天然ガス集団が中央アジアのカザフスタンに油田権益を持つ石油会社を買収、マラッカ海峡を経由しない原油調達ルートの多様化を進めている。

かつて英・オランダのアジア植民地政策の要は、インド洋から中国（南シナ海）へ至るマラッカ海峡とスンダ海峡（インドネシアのスマトラ島とジャワ島間）をいかに確保するかにあった。原油というライフラインで脱マラッカ海峡化、内陸化を進めているように見える中国の動きは、マラッカ海峡の今後の機能や沿岸地域、中央アジアの安全保障にも影響を与えるかもしれない。また、海洋アジアから陸のアジアへの時代をも予感させる。

日経香港社 奥村幸広